

批判仏教の背景の批判的考察

J. ハバード
Jamie HUBBARD

はじめに

1980年代半ばに、ふたりの著名な仏教学者が、「正しい仏教」の定義と宗教において学問、そして学者がはたすべき役割をめぐって、他の仏教学者だけでなくかれらの属する曹洞宗禅教団を相手取る論争を繰り広げた。袴谷憲昭氏と松本史朗氏である。両氏は数多くの論文や著書でこのテーマを追求し、仏教徒にとっての真実とは何かという問題と、それに対して学者の取るべき立場をかれらがどのように考えているかを反映して、そのアプローチは「批判仏教」として知られるようになった。それはまた、かれらの論客ぶりをよく表してもいる¹。彼ら独自の論争的なスタイル、大部の著作、深遠な学識、その批判が広く社会的宗教的な意義をもっていたため、両氏の学問は自ずと大きな反響を招いた。反響の波は西洋の学者の間にも及び、1993年11月にはワシントンで開催されたアメリカ宗教学会 (American Academy of Religion) で「批判仏教」というパネルが開かれた。このパネルでの研究発表をもとに、より深く広く発表の機会をつくろう、という企画がすすみ、論文集 *Pruning the Bodhi Tree* (『菩提樹を剪定する』) の出版にいたったのである²。

この論文集の出版は、「批判仏教」の概念をその批判の対象との関係において紹介し、今日の学問におけるポストモダンの傾向、傍観者的な研究者と熱心な宗教実践者との分離、そして学問における社会的行動主義の立場、といったコンテクストのなかで批判仏教を位置づけることを目的としていた。

上に述べたように、批判仏教は二つの問題を取り上げていると思われる。一つは「仏教　つまり正しい仏教　とは何か」という問題、そしてもう一つは「われわれは、仏教研究にたずさわるものとして、どのような方法論を考えるべきか」という問題である。これはお互いに関連をもつ問題だが、ここでは、第一の「仏教とは何か」というたいへん興味深い問題には触れず、第二の方法論に関する問題を考えてみたい。というのは、方法論や政治的意味について、毎日の研究課題にすることはなくともときおり考えることは重要と思われるからである。われわれは「いかにして」学問を追求すべきかを問う袴谷・松本両氏の思索のなかに、「正しい仏教とは何か」を追求するために「なぜ」両氏が学問的客観主義と訣別したのかを知ることができる。本稿の最後では、このような方法論はまた、アメリカの学問における趨勢とも共鳴するものであるということにも触れる。

本稿では、アメリカでの仏教研究というコンテキストにおける批判仏教について、そして、日本だけでなく、西洋の研究者にとっても、なぜ批判仏教が重要な意味を持つのか、ということについて論じようと思う。この問題について、私の同僚であり、宗密の研究で知られているピーター・グレゴリーは次のように書いている。

批判仏教のような議論・論争がアメリカの学会で持ちあがるようなことは、想像もできない。アメリカ・日本という太平洋の両側から、仏教研究における両国の制度的・社会的コンテキストのちがいを考えるとき、私たちは最近盛んに言われ

ている 知識社会学 (sociology of knowledge) ということを考えざるをえない。つまり、私たちが、追究しようとする分野、テーマ、追究の方法、さらにそこから引きだされる結論が、研究機関のありかたや、学問的土壌によっていかに形作られ、制限されるか、ということである³。

グレゴリーのいう「異なる制度的社会的コンテキスト」とは、つまり、日本においては、仏教学者の大多数が実際に仏教徒で寺院の生まれであり、仏教系の大学で教鞭を取る人々である、ということと言わんとしていると思われる。そのような背景のため、日本の仏教研究の議論も、根本的には、宗派的護教的になってしまうのであり、このようなことは、西洋における科学的客観的な学問の伝統の中では起こりえない、とグレゴリーは言うのである。

批判仏教が、まさに、この「客観的学問」というポーズそのものに異論をとるものであることは、後ほど取り上げることにして、まずグレゴリーのいうように「批判仏教のような議論・論争がアメリカの学会で持ちあがる」ことが、はたして「想像もできない」ことなのだろうか。そのことについて考えてみたい。

批判仏教の背景

はじめに、日本における批判仏教の背景をいくつか簡単にまとめてみよう。

グレゴリーがアメリカの仏教学は客観的・科学的であると考えているのと同様に、西洋では、日本の仏教学は文献分析と、その結果に基づく歴史的考察だけを問題にし

ていると考えられている。明治、大正時代にヨーロッパから学んだ文献研究の方法に習熟した結果、日本の仏教学は、世界でもっともすぐれた文献学であると認められてきた。おそらくそのため、日本の仏教学がイデオロギーや宗論の面から公然と挑戦されることもなかったと思われる。ホゼ・ガベソンは「学問としての仏教研究と理論の役割」(“Buddhist Studies as a Discipline and the Role of Theory”)という論文のなかで、日本の学問の定型は「枝葉末節な文献学、または目録・索引作成と辞書編集から成り立っている。それはどうみても創造的、革新的といえるものではない」と述べている⁴。ちょうど日本社会のいろいろな面における「ホンネ」と「タテマエ」の共存と同じように、客観的文献研究というホンネに基づく、この国における仏教学の原則には、「和」というタテマエがあるといえるかもしれない。

そして、袴谷・松本両氏が「仏教とは何か、そして、仏教というべきでないものは何か」という重大な議論をひきおこしたのは、まさにこの仏教学の「和」の世界においてなのである。両氏の論は、ここ数年の間に西洋でも知られるようになってきた。それはつまり、「仏性は仏教にあらず、本覚思想も、京都学派も、維摩経の不二思想も、真如も、禅のほとんども、仏教ではない」というのである⁵。

それではいったい、何を以て仏教というのか。「批判だけが仏教である」と、袴谷氏はその著書のなかで彼らしい攻撃的姿勢で唱えている⁵。その立場から袴谷氏は、批判仏教を、彼の言う「場所仏教」と真っ向から対立させている。従来の仏教のほとん

どが、真偽を批判的に区別・判別することに無関心で、審美的神秘主義に支配されていると感じ、これを「場所論的仏教」とよんでいるわけである。もう少し正確にいうなら、袴谷・松本両氏とその同志によると、仏教思想は、言葉と論理をおとしめることによって、まさに真理と社会正義の真髄である釈尊の般若を見極める力(critical discrimination)を抹殺している、というのである。釈迦は、存在の真理を見極め、煩惱を消滅し、それでその真理を教え、衆生を救う道を教えた。ところが、袴谷・松本両氏によると、その後の仏教の伝統は、真理を語る可能性そのものをやっきになって否定してきた、というのである。袴谷・松本両氏が批判しているのは、仏教の伝統ばかりではない。老子、荘子の「道」、西田幾多郎の場所、価値判断を避ける「客観的学問」、何でもかでも等しく真実性と人間的価値をもつ、と認めるポスト・モダンの反動的でいいかげんな態度、などにも次々と矛先をむけ、これらが仏教の批判精神に逆らう場所哲学であり、頭の悪い人たちによって混同されてしまったものである、と攻撃している。

広く受け入れられている仏教思想の伝統を辛辣に批判することによって、袴谷・松本両氏は、日本と西洋のほとんどの仏教徒が当たり前のこととして受け入れてきたことを、問題化して問い直しているわけである。そうすることによって、彼らが「知性の病」とみなす場所論と戦い、真理であると主張されているものを批判的に見極めること自体が仏教である、という彼らの見解を示しているのである。

仏教は、批判的思考にもっとかかわるべきだ、という袴谷・松本の主張は、同時に彼らの社会批判にもつながっている。

「こうである」という学問の記述的姿勢を離れ、「こうであるべきだ」という規範的姿勢をとる両氏は、仏教の真理にてらしあわせ、仏教を装う日本の文化の裏にあるイデオロギーを批判する。社会的不正義、性差別、制度的差別、帝国主義、政治的弾圧、環境破壊にも日本の土着思想と仏教徒によるその仏教との混同が影響していると指摘する。なかでも、本覚と和の思想、つまり京都哲学と、日本の独自性を強調する理論を攻撃し、それらは仏教哲学の究極の境地を装った差別思想であり、社会的不正義の例だとして批判する。

このような攻撃的論証に、西洋の研究者がなぜ関心をもつのが、なぜそのようなディスコースが宗派のそとで重要な意味をもつのか、という問いに対しては、いくつもの理由が考えられる。まずもっとも単純には、仏教学者の仕事は学僧の思想を研究することだという理由がある。つまり、袴谷・松本両氏は、伝統的な意味でも第一級の仏教学者であり、その研究は海外でもよく知られ引用もされているが、彼らの本覚思想・如来蔵思想批判においては、両氏は仏教徒として、曹洞宗の禅僧として、議論しているのである。とは言っても、本覚思想にしろ、如来蔵思想にしろ、その思想が生まれた時からすでにそれにたいする批判は何度もあった。だから、袴谷・松本両氏がそれを今日また問題にするということには、どんな意味があるのだろうか。

この問いに対する答えは、両氏がこの世

界に引き起こした情熱とその具現である *Pruning the Bodhi Tree* に収められた論文におのずから求められるといえるが、私からもこれらの論文のもう少し広い意味でのコンテキストになると思われることをいくつか指摘しておこう。

まず、批判仏教の論証性はよくいわれる現代日本における仏教の倫理的、制度的危機というコンテキストの中で、考えられるべきだと思う。現代日本における宗教的ニーズに、積極的に答えようとする動きは、新宗教のめざましい興隆、浄土真宗内部の同朋会運動にみられる改革精神などに認められる。そういう意味では、曹洞宗の考え方に対する批判的見解を刺激したのが、「町田事件」といわれるできごとであった。1979年に開かれた「人種差別と平和をめぐる世界会議」(World Conference on Racism and Peace)で、当時日本仏教徒連盟の会長であり、曹洞宗の総務長でもあった町田宗夫氏が、「日本にはいかなる形の社会的差別も存在しない」と発言した。町田氏は、5年後にこの言を撤回し、曹洞宗もその長い歴史に渡る社会的差別を認めると同時に、実態調査と対策のために数々の委員会を設けた。しかし、事態をより深刻に考えた人々は、曹洞宗の歴史においてこのような慣わしが疑問も抱かれずに続いてきたのには何か根深い理由があるのではないかと考えるようになった⁶。

このようなことは、つかのまの嵐にすぎないと思う人もいるかもしれないが、当時も、そして今日でも、曹洞宗の内部でも、被批差別部落民の烙印を押された人々にとっても、これは重大な問題なのである。袴

谷氏の「差別的事象を生み出した思想的背景に関する私見」は、調査委員会のために書かれたものであり、学会ではなく、大阪の部落解放センターで発表されたものを補足して曹洞宗に報告されたものである⁷。この事件がひきおこした烈火はしだいに下火になってはいったが、曹洞宗の人権擁護推進本部はこの問題に関する数多くの出版を続け、事件のしこりはいまだに曹洞宗の外に残っている。他方で、袴谷氏自身は、曹洞宗の僧職を辞して還俗した。

曹洞宗内における町田事件だけが批判仏教のコンテクストというわけではない。次に、もう少し広い意味で日本の政治文化的コンテクストをみてみよう。これらの論文の多くが最初に発表された当時（1985年から1990年ごろ）、日本では自民党の圧倒的勝利に続いて、中曽根康弘が総理大臣に就任し、アメリカではレーガン大統領が第二期の任期に入り、政界だけでなく、宗教にも文化にも左右両派の区別がつけられるようになってきていた。日本では政府要人の靖国神社参拝の是非が問題になり、アメリカではの過激なキリスト教右翼がホワイトハウスを牛耳るのでは、という恐怖感が広がっていた。このような雰囲気の中、日本では、日本人論的なレトリックが高まり、その推進者たちが政府となれあっているのを見て、全体主義への後退を懸念する人たちはますます警戒心を強めた。

このころ宗教をめぐるさまざまな論争が日本で巻き起こっていたことは、西洋ではあまり知られていない。高校の教科書にも、たとえば天皇の葬儀は仏式か神道かとか、日本はもっと自衛力をつけるべきかどうか、

といった問題は書かれていない。しかし、これらのことは、日本や近隣のアジア諸国にとって深刻な問題である。当時のこういった社会問題が、袴谷・松本両氏の論文にはたえずとりあげられている。そのことは、批判仏教の社会とのかかわりが、ある面で、西洋にも広がっている文化戦争にみられる論争にも似ているからではないかと思われる。

第三に言えることは、日本の仏教学者が、西洋の少なくともアメリカの仏教学者に比べると、はるかに公の発言力を持っているということである。日本は、いうまでもなく仏教国である。そして読書欲旺盛なその国民は、仏教文化をあらゆる面にわたってたえず知りたがっている。著名な仏教学者のほとんどが、一度は大衆向けの入門書を書いているし、いろいろな週刊誌や新聞、テレビなどマスコミにも登場する。同時に彼らの多くは、代々続く寺の住職という重要な役目も担っていて、そのため宗派的、制度的、政治的コミュニティーを代表する発言者という役目も兼ねることになる。したがって、このような多様な役目を峻別しないのは、袴谷・松本両氏にはじまったことではない。他の学者に対する両氏の批判も、客観的学問の装いに隠された仏教徒としての責任を認識させようという試みであり、学者としてもその公的発言や説教や大衆向けに書くものの内容に責任をもたなければならない、と言おうとしているのである。

最近、両氏は私に対してつぎのように述べた。第二次世界大戦期に見られた仏教学者と政治的権威とのなれあいは悲惨な結果を招いた。それはいまでは「昔の話」とさ

れるかもしれないが、仏教学者の大衆に対する責任は、非論理的・神秘的体験を強調するオウム真理教のようなオカルトや「ニューエイジ」宗教に対して日本人が熱心になってきた今日、ますます重要な問題になってきている、と。

批判仏教の広がり

批判的な仏教研究の必要性が、このように日本の宗教的、政治的、文化的状況に根差したものであるとみるならば、その状況はまさに、西洋の学問の傾向とも共通する面が多い。この類似性のなかでもますますもとも重要なものとして挙げられるのは、実証主義的、歴史科学的な事実に対するポストモダンの拒否反応と、また「学問は純客観的であるべきだ」という一般概念を拒絶しようとする態度である。「客観的」学問という通念の脱構築は、いまや、人類学、フェミニストの批評、比較文学などの分野にとどまらず、自然科学の分野でもおこなわれているし、仏教学ももはやこれを免れることはできないだろう⁸。

このような動きに関連して、今日の学問研究には行動主義的傾向が　その賛否は別問題として　ますます強くなってきている。つまり、「学者というものは、たとえ客観的に記述(de-cribe)しているときにも、ある価値観をもって規定している(pre-cribe)」という見方をするならば(つまり、価値観のない研究や純粋に客観的な研究などはじめからありえないとすれば)、規範的価値判断がその次に来るのは自然な、おそらく良心に照らして必然なことであろう。

だから、文化批判(cultural criticism)とかポスト・コロニアル研究(post-colonial studies)といった分野は、そもそもが行動主義的な性格を持つものなのである。そういった意味で、袴谷氏は、ポスト・モダニズムの非道徳的で脆弱な相対主義を非難しているとはいえ、ポスト・モダニズムと同じように客観主義者や実証主義者のアプローチをしりぞけ、歴史の語り(narrative)に目を向ける彼らの方法は、西洋の学問研究における語り重視と少しも異なるところはないし、彼の批判の提唱は、今日の学問の世界における行動主義者の問題追求の姿勢と変わらないように思われる。仏教学の場合、大学教授でありながら仏教徒として社会的活動にかかわっている人々も多いのである。英語ではそのような人々を“engaged Buddhists”[活動的仏教徒]と呼ぶ。

このように考えると、批判仏教を、原始仏教への復帰の呼びかけとみるよりも、私にはむしろそのまったく反対のアプローチであるといったほうが適当に思われる。原始仏教への復帰というアプローチこそ、仏教にその宗教性、つまり主観的、信仰的な過去から切り離すことによって科学的近代性をもたらそうとしたものだったのである。批判仏教とは、仏陀を歴史的に探究することではない、ということについては、松本氏がつぎのように言っている。「(であるから)われわれは、道元の教えに対しても、チベットの中観哲学者に対しても、さらには仏陀の教えに対しても、批判的に考えなければならない」と⁹。つまり、批判的態度とは、仏陀の教えでさえも、それが縁起や無我に反するものならば批判も辞さな

い、という態度であり、批判仏教とは、歴史的文献的起源の探求ではなく、哲学的に批判的に真理を追及するという意味なのである。

批判仏教の知識社会学

とはいっても、この批判的な課題は仏教の真理という文脈のなかで追究されているのであり、袴谷・松本両氏も仏教徒として議論しているのである。この護教的宗論的な立場の方がおそらく、仏教とは何かという問題そのものよりも議論の余地が多いとされている。このこともまた、西洋での仏教研究の今日の動きとかなり共通しているのである。マックス・ウェーバーが宗教を科学的に研究することを提唱して以来、西洋での宗教研究は当初より神学から自立した、大学の研究分野の一つとして自らを確立することに時間と労力をかけてきた。仏教学もその一つで、今日にいたってもヨーロッパの文献研究の伝統に従っているところが大きいのである。しかし、袴谷・松本両氏がウェーバーの客観的学問を否定するのと同じように、西洋の仏教研究者のなかにも、「学者であり熱心な仏教徒であれば、その信ずるところを論じることのできる場がアカデミック・ディスコースにおいてもあるべきだ」と公言する人たちがふえてきている¹⁰。

日本の場合のように寺院での職務などを兼ねている仏教学者は確かに西洋にはほとんどいないが、それでも仏教徒を自称し、いろいろな形で西洋の仏教コミュニティーに参加する研究者の数は増えている。たと

えばドナルド・ロペーズは、大学教授のなかにも得度をうけたメンバーがいることにふれ、「僧侶の師としての役目が、しばしば学者に求められる」とまで言っている¹¹。またロバート・サーマンは、西洋の大学の僧院的起源とわれわれの人生における教育の役目に触れ、研究者のことを「プロテスタント僧」とよくいっている。ピーター・グレゴリーが言うように、仏教研究者がこのようにアカデミーのなかで異なる役目をもつようになったその状況をみれば、異なる文化のなかでいかにして知識というものが産み出されていくか、ということを変えて考えさせられるのである。袴谷・松本両氏の論文は、そのような考え方を促すものである。であるから、「批判仏教のような論争がアメリカの学界で持ちあがることは想像できない」というグレゴリーの予想に反し、上に指摘したようにアメリカにおける仏教研究の状況も、日本とそれほど変わるものではない。アメリカの仏教研究者の中にも先に述べたような立場をとる者は数多くいる。もっとも、批判仏教の視点に立つなら、いわゆる自称客観的な学者でさえ、実際には仏教徒として仏教は何であるかを論じているのである。

おわりに

最近私は松本氏に次のように言われた。松本・袴谷両氏の論文から、西洋の読者が、両氏は理性と知だけがすべてであると言っている、というふうに誤解しないでほしい。むしろ両氏が言いたいのは、個人にとっても、社会にとっても、ものごとはよい方に

向かう、という肯定主義なのである。ただ、その楽観主義が前提としているのは、われわれには言葉を使って自己を表現し、批判的に考え、変革と進歩を辞さない力があるはずだ、ということなのである。そして、袴谷氏もまた、「ことばを信ずる者が思考を改革していくこともできるのだ」と言っている。しかし、仏教には、ことばと理屈を拒む伝統があり、したがって、変革の可能性も退けられてしまうのである。袴谷・松本両氏を批判に駆り立てたのは、まさにこの人間の進歩の可能性に対する信頼であろう。

註

¹ 膨大な数に及ぶその文献的歴史的研究のほかに、批判仏教に関する著書は、以下を参照のこと。袴谷憲昭著『本覚思想批判』大蔵出版、1989年、同著『批判仏教』大蔵出版、1990年、同著『道元と仏教十二巻本「正法眼蔵」の道元』大蔵出版、1992年、同著『法然と明恵』大蔵出版、1998年、他。また、松本史朗著『縁起と空 如来蔵思想批判』大蔵出版、1989年、同著『禅思想の批判的研究』大蔵出版、1993年、他。

² Jamie Hubbard and Paul Swanson, eds., *Pruning the Bodhi Tree: The Storm Over Critical Buddhism*, (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1997).

³ Cf. Peter N. Gregory, "Is Critical Buddhism Really Critical?" *Pruning the Bodhi Tree*, 286.

⁴ Jose Ignacio Cabezon, "Buddhist Studies as a Discipline and the Role of Theory," *Journal of the*

International Association of Buddhist Studies 18/2 (1995): 244. "[The stereotype of Japanese scholarship is that it] consists entirely of philological work of insignificant worth, or, alternatively, of cataloguing, indexing and lexicography; in no instance do we find anything 'creative' or 'innovative' in Japanese scholarship."

⁵ 『批判仏教』、3. *Pruning the Bodhi Tree*, 56.

⁶ この事件の状況とそれに続く論争、その批判仏教における役割については以下を参照。William Bodiford, "Zen and the Art of Social Discrimination," *Japanese Journal of Religious Studies* 23, 1996; 1-28.

⁷ 『本覚思想批判』、134-58. 英訳は *Pruning the Bodhi Tree*, 339-55.

⁸ これに関する仏教学の方法論については以下を参照。 *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 18/2 (1995). 仏教学における文化批評については以下を参照。 Donald C. Lopez, ed., *Curators of the Buddha* (Chicago: University of Chicago Press, 1995).

⁹ *Pruning the Bodhi Tree*, 161. "It is imperative, therefore, that we be critical towards the teachings of Dōgen, of Indian and Tibetan Madhyamika philosophers, and even of Buddha himself."

¹⁰ 仏教学における規範学問の役割については以下参照。 Jose Cabezon, "Buddhist Studies as a Discipline," 256-60, Luis O. Gomez, "Unspoken Paradigms," *Journal of the Association of Buddhist Studies* 18/2 (1995): 201-3, 204-12.

¹¹ Donald S. Lopez, Jr., "A Sangha-less Sangha," *Tricycle* 5/3 (Spring 1996), 101.

ジェーミ・ハバード
Numata Professor of Buddhist Studies,
Smith College